



第 54 回 ー三輪山と大神神社ー

秋の1日、奈良南郊のドライブに出かけ、友人が行ったことがないという大神神社（おおみわ）をまず目指した。大神神社は三輪山を神体とするため、本殿を持たず拝殿だけがあるのが特長である。このような神社は明治以前には多数存在したが、明治になって本殿を作らなければいけないと云うことになり、石上神宮や加茂別雷神社など中世まで社殿のなかった神社でも本殿が作られた。今になると、全国的に著名な神社の中では、大神神社だけが本殿がないということになっている。

その山麓を南北に通ずる「山辺の道」は日本の代表的な古道の一つである。山辺の道は大和平野の東側を南から北へと、山裾を縫って三輪の金屋から奈良の歌姫まで通じている。金屋は三輪山の南麓を流れる初瀬川と、お山とに挟まれた带状にのびる集落である。ここは古くから大阪から大和川を遡ってくる舟運の終着場であり、山辺の道、山田道、上津道、初瀬街道などの接点となる水陸交通の要衝であり、我が国最古の交易場（市場）として海石榴市（ツバイチ）の名を今に残す場所である。歴史的には458年（敏達天皇14年）に物部守屋が廃仏毀釈の指揮をとり、尼僧らを鞭打った場所であり、また608年（推古天皇16年）遣隋使小野妹子らが唐客・裴世清を伴って帰国の際には、大和川を遡りこの地に上陸したと云う由緒も残されている。

奈良市から国道24号線を南に向かい車で走り、なるほど神奈備と納得出来る姿で三輪山がくっきりと見えだすのは、田原本町の唐古・鍵遺跡のあたりである。三輪山は大和の東を限る青垣・春日山系の南限にある。「飛ぶ鳥の明日香」という枕詞があるが、それは南の橘寺あたりから見る北方の眺望を示している。橘寺の東門を出たところから川原寺・岡本宮・浄御原宮と飛鳥古京が見渡せるのであるが、その古京の彼方の空を、三輪山を頭部に、龍王・巻向を両翼とした大鳥が、いっぱい翼をひろげて天翔って来るように見える。その情景から「飛ぶ鳥の明日香」は由来したという。

まず、左折して県道田原本・櫻井線にはいり、大鳥居が見えたら更に参道三輪山線へと左折し、大鳥居に近づくとその傍らに一ノ鳥居と三輪の茶屋がある。この茶屋は浄瑠璃「恋飛脚大和往来」、梅川と忠兵衛の恋の逃避行の宿である。鳥居をくぐり JR 桜井線を越え、松の馬場の側道に駐車する。二ノ鳥居をくぐると、杉をはじめ椎、檜、樺などが茂る森である。玉砂利の敷かれた参道を進み、御手洗橋を渡ると、左側に祓戸神社がまつられている。ゆるやかな石段をのぼった左に手水舎があり、水船には霊水がふんだんに溢れ出ている。正面の二十九段の石段を上りきったところには、太い柱が建っている。足もとから齋庭が広がり、正面には切妻桧皮葺の拝殿が、杉や椎の老木を背景にどっしりと横長に建っている。「杉の杜」と呼ばれてきただけに、神域の周囲は老杉がそそり立ち、中でも齋庭のやや南よりのところにある二股の大杉は「巳さんの神杉」という名物である。

大神神社は大物主を主神とする大和国の一の宮である。崇神天皇の時代に疫病が流行し、人民が沢山死んだと云うことがある。そのときの対策が「古事記」と「日本書紀」で描写がやや違うけれども、話としては一緒のことが書かれている。天皇の夢とか、家来（家来）の夢の中に大物主神が現れて、こういう困難を乗り切るためには、わが子、オオタタネコ（大田田根子）を見つけ出して、それにお祭りを担当させよという、この部分は「古事記」も「日本書紀」も一致している。さて、このオオタタネコがどこで見いだされたことになっているかが問題である。「日本書紀」では「茅渟県陶邑」となっている。

「陶邑」に「スエムラ」とルビを振ることが一般的に行われていることに、異議を唱えたのは森浩一氏である。オオタタネコが見つかったという邑は、今まで考えられていたような窯業地帯としての農村という景観ではなく、山間部などにある人口数千人のちょっとした町、鍛冶屋さんもあれば、商店や居酒屋、郵便局もあるという、ややにぎやかなところ、この「邑」は「マチ」とルビを打つべきと云うのである。「魏志」倭人伝に「倭人は帯方の東南大海にあつて、山島によって国邑をなす」とある。有名な書き出しで、山がちな島の地形で国邑をなす。この「国邑をなす」というのを、ほとんどの人は「国」と「邑」と分解して読んで「クニ」と「ムラ」と理解していた。ところが倭人伝というのは、烏丸鮮卑東夷伝の倭人条であって、その全体を見ると国邑と云うのが出てきて、「都」という意味に使われている。これは韓伝にも出てきて、東洋史の学者は国邑を国の都と訳している。国と邑を二つに分けるのではなくて、邑とはムラという概念とは全く違う、大きな拠点集落或いは小都市、すなわち「マチ」なのだというのが「森説」である。

さて、三輪山はまた奈良盆地では太陽の昇る山であり、そして二上山は日の沈む山である。春分あるいは秋分の日はどこから見れば、三輪山のとっぺんから太陽が上ってくるか研究したカメラマンがいる。例えば、その一つは田原本町の多神社であった。「古事記」を編纂した太安万侶の一族が祖神と安万侶を祀っている神社である。その場所は弥生時代の大きな集落の遺跡のある場所であるが、弥生人が三輪山に対する信仰を持っていたかどうかは明らかではないが、春分・秋分に三輪山に昇る太陽を眺めることの出来る場所は三輪山信仰の1つのポイントとなっているのではないかと考えられている。しかしこれらの場所からは残念ながらその信仰を示すような遺物はまだ出ていない。

現在神体山とよんでいる山岳、またかつては神体山として信仰されていた山岳には、その山中に多くの磐座が存在する。三輪山には神の御座する場所として、3箇所の磐座が存在し、奥津磐座は大物主命、中津磐座は大己貴命、辺津磐座は少彦名命の神座の巨石群であると「大三輪鎮座次第」に述べられている。また、磐座でどのような祭りが行われていたかは、万葉時代の歌に詠まれているところから、窺いがい知ることができる。例えば「忌串立てて酒瓮据えまつる祝部がうづの玉陰みればともしも」とか、あるいは「三諸の神奈備山に五百枝刺し」などであり、またその他の歌にも「竹玉にしじに抜き垂れ」とあり、おそらく神仕えのものが斎串をたくさん立て、その前に酒壺を据えて祭りをしたようである。子持ち勾玉や管玉を沢山糸に通し木の枝にかけて祭った様子が想像される。そして今日の三輪山の信仰のように、全山にあまねく満ちている神霊を拝する方向におちついたものであろう。

古代の人々である三輪族は草根木皮を天然の薬として使うことを伝承してきた。大和の大峰山を開いた役の小角は三輪族であるが、漢方の伝わる以前に彼が現在も伝っている和方「陀羅尼助」を創製した話は有名である。毎年4月18日に本社と摂社狹井神社で行われる鎮花祭（はなしずめのまつり）は俗に「くすりまつり」といわれる重要なお祭りである。現行の鎮花祭では、神饌の中に百合根、忍冬（すひかずら）の葉草が献供される以外、特殊神事らしきは見当たらない。むしろこの祭りのうつしといわれる京都今宮のヤスライ祭、大津の長等神社の祭礼などが有名であり、古い鎮花祭がたまたまこれらの神社に残ったのであるといわれる。現在は鎮花祭を中心に薬神講が結成され、大和の製薬業者をはじめ、大阪・京都の製薬会社が加盟して、祭典に協賛している。

攝末社の中で最も遠い奈良市本子守町に鎮座する、率川神社（率川坐大神御子神社）の例祭が三枝祭（さいぐさまつり）は通称「ゆりまつり」といわれ、お祭りの起源は大変古く、鎮花祭と同様に疫病除けの祭儀である。三枝祭とは、三枝の花（笹ゆり）で酒樽を飾りお供え申し上げるので、その名で呼ばれている。ユリは和方でも、漢方でも古くから頻用された薬物で、本草では神農本草経の昔から収載されている。神農本草経に記されたユリは、邪気を祓い、内蔵の機能をよくし、排泄の滞りをなくし、しかも気血を補う強壮剤の薬効を有する薬物であるという。東洋医学の原典とも云われる金匱要略の第三編には、百合病の病状とその治方が論じられている。そこにササユリの精細な図を掲げ、ユリの中でも薬用には笹ユリを第一等とすることを記している。

酒と三輪は「味酒（うまざけ）三輪」と枕詞に使われているほど、深い関係を持っている。日本書紀は「崇神天皇8年4月乙卯16日、高橋邑の人、活日（いくひ）を以て大神の掌酒（さかびと）となし給う」とその由来を述べている。活日は最も古くその名の現れた酒の専門技術者であり、杜氏の先祖として三輪の境内の活日神社に祀られている。活日とは活霊とも書き、それは麹菌であるとも云われているのはおおいに興味あることである。また、大正7年に三輪・山の神祭祀遺跡より発見された土器の中には堅臼、堅杵、柄杓、箕、案など醸酒の用具の模造品があった。この出土品は弥生時代の三輪の姿を示すものと考えられる。

造り酒屋の軒先に大きな杉の毬、杉玉が吊られているのを見かけることがある。これが「三輪の酒ばやし」「しるしの杉玉」である。大神さまの御霊の憑代として、酒造家の軒先や酒蔵に吊ってご加護を願う古い信仰の姿であり、また新酒が出来上がったことをしらせている。オーストリアのウィーン郊外にも新しいブドウ酒ができると、軒先に松の枝を束ねて吊るし、道行く人に新酒ができたことを知らせるという同じような習慣がある。貯蔵し熟成したブドウ酒を珍重するだけではなく、新酒も喜んで飲まれているのである。夏の夕べ、ウィーンの森でワルツを聴きながら、あるいは大声を張り上げて歌いながら、ワインをソーダで割ってジョッキで飲むというようなことをやった記憶がある。つまみはソーセージとフライドポテトで、全くビールと同様の感覚で飲み干していたように思う。

（岡野 実）

- 文献 1) 大神神社（第3版） 中山和敬著 大神神社編 （2013）
2) 三輪山の考古学（5）三輪と和泉 ―オオタタネコ伝承の考古学― 森浩一（共著）学生社 （2003）